P2-40 消化器外科医のシャント作成術

岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 消化器外科学[1)]、幸町記念病院[2)]
○近藤喜太[1)]、宮崎雅史[2)]、高津成子[2)]、岡　良成[2)]、松田浩明[1)]、宇野　太[1)]、信岡大輔[1)]

【目的】 近年、外科医不足がいわれて久しい。一般外科医に限らず、シャント作成ができる外科医も不足する傾向にあると考える。演者は大学病院消化器外科の勤務医であったが、1年10ヶ月、週一回の非常勤勤務先でシャント作成を指導いただく機会を得た。指導いただいたシャント作成の手技と、手術時間からみられるラーニングカーブを提示し、外科医不足がいわれる現状での今後のシャント手術の位置づけについて、私見を述べたい。

【成績】 2009年5月29日より2011年3月11日までの約22ヶ月間で22例の内シャント作成術を施行した。手術時間の平均は58分（最長111分、最短35分）であった。22例を半分で前期11例と後期11例に分けると前期、後期の平均手術時間はそれぞれ61分、54分であった。勤務当初はシャント手術についてはまったくの素人であったが、月一回程度での手術経験で、グラフでのプロットおよびその外挿直線では、わずかずつではあるが、手技が安定していることがわかった。必ずしも多くはない手術経験ではあったが、月一回の手術指導のもとでの執刀により初期と比較してあきらかに後半の11例は手技が安定していた。手術の頻度が増えれば、この傾向はさらに顕著なものとなったと思われる。

【結論】 シャント手術は奥が深く、一朝一夕にマスターできるものではない。しかし、血管の専門医でなくてもシャント手術に興味を持ち、シャント手術の技術とそのコンセプトを学ぶこと、また少しでもシャント手術ができる医師が育つことは、さらに外科医不足が問題となり、透析管理とシャント手術も専門分化している昨今では、多少なりとも意味があることではないかと考える。